『源氏物語』「桐壺」冒頭の授業

はじめに

『更級日記』冒頭で作者は、「東路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人」と自己のことを語り出すが、この表現の背後に『古今和歌六帖』の「東路の道の果てなる常陸帯のかごとばかりもあひ見てしがな」（第五・帯・紀友則）が踏まえられているのではないかということが注釈書に指摘され、多くの高等学校用古典教科書の脚注がそれに従っている。表現上の類似は明かで、「東路の道の果て」という表現が和歌に好まれた可能性もあることから、この作者の作品の冒頭にふさわしい出典として認定されてきたのだろう。このことに関連して、小松英雄氏が次のように述べている。

> 『更級日記』の作者が『古今和歌六帖』を座右に備えていたなら、この和歌が彼女の関心を引いた可能性は十分にありますが、前引のように、彼女が夢中になって読んだ物語のなかには『在五中将』、すなわち『伊勢物語』があり、さきに引用したように、八つ橋が、その跡もないことに失望したりしていますから、武蔵の国から下総の国に舟で渡るあたりは、ことのほか身近に感じたに違いありません。
>
> 『伊勢物語』の道をたどれば「東路の果て」はすみだ川の渡しであり、彼女の育った上総の国（千葉県南部）は、舟を下りた下総の国よりも「なほ奥つかた」です。このように考えるなら、『更級日記』冒頭の一節は、『古今和歌六帖』ではなく、『伊勢物語』に基づいていると見なすのが順当です。『古今和歌六帖』所載の紀友則の和歌は恋の歌ですから、『更級日記』の冒頭でこの日記の読み手が連想するにふさわしいものだったとは思えません。
>
> なにかを書く目的は、読まれるため、読ませるためであること、したがって、大切なのは書き手がどういうつもりで書いたかではなく、読み手がそれをどのように読み取るかです。文才のある書き手なら、読み手がどのように読み取るかを計算しながら書いているはずです。『更級日記』の作者は、読み手が『伊勢物語』に親しんでいることを前提にして、自分が京の文化と隔絶された辺鄙な地に育ったことを知ってもらうために、『伊勢物語』の「あづまくだり」を思い起こしてほしかったのでしょう。
>
> （小松英雄『伊勢物語の表現を掘り起こす』笠間書院・二〇一〇）

私はこの推定をおもしろいと思うし、高等学校の古典教育の場では積極的に紹介したいと考える。というのも、高等学校の古典学習では、一般に『伊勢物語』の「東下り」は一学年の「国語総合」で学習することが多く、『更級日記』は二学年の「古典Ｂ」で（『源氏物語』とも関連させながら）学習することが多いからである。『更級日記』を学習する際に、『源氏物語』と関連づけるだけでなく、『伊勢物語』とも関連づけが可能となれば、教材の復習や鑑賞といった観点からも、学習がより深まる可能性がひらけるのである。

そんなこともあって、私が関係している教科書の編集に当たっては、「東路の道の果て」の注として、「常陸（ひたち）の国のこと。当時、常陸の国は東海道の果てと意識されていた。なお、

伊勢物語第九段「東下り」を意識した表現ともいう。」という脚注案を何度か提案してはいるのだが、残念ながら編集会議で却下されている。確かに「教科書」というメディアには、それなりの矜恃がある。個人的な考えでそれに異を唱えるつもりはない。一方、授業という場で考えた時には、この小松説は魅力的な教材研究と写るのである。

＊

大学で国語科教育法を担当して十年近くになるが、この講座を取る学生（院生）の中には、研究の道に進むか、それとも現場の教員になるかで迷う諸君も少なくない。もちろん、迷うくらいだから、周囲の状況（特に金銭面か）が許すのなら、研究の道に進むことを基本に人生設計することを勧めたいが（迷っているようではムリであるというご意見もあろうが）、同時に、学生諸君には、「自分が興味・関心を持った対象についてコツコツ研究することが好きなのか、それとも、自分が興味・関心を持った対象について人に伝えて分かち合うことが好きなのか」といった観点で考えてみることも勧めている。というのも、教員に求められる大きな資質の一つとして、「伝え方が上手である」「伝えるのが好きである」という要素が大きな位置を占めていると考えるからである。いくら学識が高くても、それを上手に伝える工夫が苦手なら、一部のマニアックな生徒からは歓迎されても、大部分の生徒からは敬遠されてしまうに違いない。

作品そのものや、その作品について書かれた研究書、単行本・新書などを読み（作品研究）、そこで自分が「面白いな、伝えたいな」と思った点を、授業で生徒たちにも分かりやすく、かつ面白く伝える授業の組み立て方を工夫する（指導過程研究）、それが好きなら教員に向いているといえるのではなかろうか。新しい読みを目指して徹底的に研究するのもおもしろいが、そうやって得られた成果を、さまざまなメディアを通じて自分なりに消化・吸収し、それをうまく使って生徒諸君と知的興奮を分かち合うというのもおもしろい作業なのである。（なお、教材研究の骨格は「生徒理解＋作品研究＋指導過程研究＋評価研究」であるということも強調している。）

学生諸君には、最終的には研究の道と教員の道はそんなに大きく違ってはいない、どちらも深く作品に接し、関連研究を深めて自分なりの読みを創り上げていくのだが、①教員には成果を上手に伝えて知的興奮を分かち合う工夫が求められるので、作品そのものの研究とともに「伝えるための研究」も必要になる　②学説が複数ある場合は、正確さを踏まえながらも、斬新さや面白さ・楽しさ、つまり知的感興をより刺激してくれる説を選ぶ場合もある、といった話をしている。

＊

小松氏の著作には、面白い授業に向けての教材研究のヒントが満載されている。主なものを手に入りやすい形で紹介すると、『伊勢物語』については既に挙げたが、『徒然草』なら冒頭章段などを採り上げた『徒然草抜き書き』（講談社学術文庫・一九九〇）、『土佐日記』については、これまた作品冒頭を中心に分析した『古典再入門』（笠間書院・二〇〇六）、和歌関係なら『みそひと文字の抒情詩』（笠間書院・二〇一二）と『古典和歌解読』（笠間書院・二〇一二）などがある。また、日本語全般に関しては、『いろはうた』（講談社学術文庫・二〇〇九）、『日本語はなぜ変化するのか』（笠間書院・一九九九）、『日本語の歴史（新装版）』（笠間書院・二〇一三）などがお勧めである。

＊

さて、今回のテーマ「研究と教育」ということにからめて、私が読んで面白いと感じた本をもとに計画した古典（古文）の授業の一つを具体的に紹介してみたい。その本は、三谷邦明氏の『入門源氏物語』（ちくま学芸文庫・一九九七、旧版は『源氏物語躾糸』有精堂・一九九一）である。この本は、原文で『源氏物語』を読むための入門書として、また、大学での入門講義に代わるものとして書かれたもので、口述筆記であることから、難解とされる三谷氏の著作の中では圧倒的に読みやすく、また、内容も「入門」というタイトルとは裏腹に、『源氏物語』の本質に迫る分析が分かりやすく、かつコンパクトにまとめられていて（その分、不足を感じる部分もあるが）、最良の入門書の一つといえる。その中の「〈方法〉から冒頭場面を読む」の章によりながら、それを高校生向けの「桐壺」冒頭の授業に結びつけてみようと考えたのである。

「〈方法〉から冒頭場面を読む」の章では、『源氏物語』は「なぜという論理にささえられたプロットの物語であり、初期物語とは大きくへだたってい」ることが指摘されており、その例として物語冒頭の一文が分析されている。その分析を活用しながら、冒頭の一文を深く読み取る授業を工夫することで、『源氏物語』の面白さ・奥深さとともに、この物語本文の読解が一筋縄ではいかないことを伝える授業を工夫してみた。具体的には、冒頭の一文からどれだけ多くの情報（どれだけ多くの疑問）が読み取れるのかということを授業の中心に据え、同時に『源氏物語』という書名の意味も紹介するというもので、文法学習面では、敬語の知識の復習をかねることを目指した。

授業では、多くの発問を用意することで生徒の積極的に考える姿勢を引き出すことに常に留意している。実況中継風に授業の様子を再現してみるので、「三谷氏の論をどのように授業に向けてアレンジしたのか」という点とともに、「どのような順序で、どのような発問をしているのか」「発問に答えられなかった時、どのような発問をしてフォローしているのか」といった点にも注目して参考にしていただければ幸甚である。実際の生徒とのやりとりでは、当然のことながら誤答なども多く、これほどスムーズに授業が展開するわけではないが、おおよその雰囲気は伝えられているのではないかと思う。（なお、板書例については、スペースの関係から割愛せざるを得なかった）

＊

〔基本情報〕

●日　時　　：平成二六年六月〇日（〇曜日）

●対　象　　：都立Ｈ高等学校（進学指導重点校）
　　三学年文系　古典講読（必修選択・五単位）
　　男子十八名、女子二十一名

●教　材　　：『源氏物語』「桐壺」　「いづれの御時にか」

●教科書　　：「古典講読」（三省堂）

●学習指導目標（本時・四五分）

①『源氏物語』という作品名の意味と、作品の背景を理解する。

②『源氏物語』の冒頭の一文を正確に理解し、的確に現代語訳する。

③敬語の知識を確認する。

④今後の『源氏物語』学習に対する意欲を高める。

〔教材本文〕

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。はじめより我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきものに、おとしめそねみ給ふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふ積もりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよ飽かずあはれなるものに思ほして、人のそしりをもえ憚らせ給はず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部、上人などもあいなく目をそばめつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。唐土にも、かかることの起こりにこそ、世も乱れ悪しかりけれと、やうやう、天の下にもあぢきなう、人のもて悩みぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにて、交じらひ給ふ。

父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ古の人の由あるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえ華やかなる御方々にもいたう劣らず、何ごとの儀式をももてなし給ひけれど、取り立ててはかばかしき後ろ見しなければ、事ある時は、なほ拠り所なく心細げなり。

〔授業ＬＩＶＥ〕

＊Ｈ：私、Ａ～Ｘ：生徒（毎時多数を指名するので、指名順は単純に座席順である）

＊授業開始時の単語小テストや音読などは省略。

●「源氏」とは？

Ｈ：では、『源氏物語』の本文に入ります。教科書〇〇ページを見て。冒頭は、「いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。」となっている。これが、全五十四巻、帝三代、七十数年に及び物語の冒頭です。この冒頭文は、そんなに簡単に読み飛ばせるものではないんです。そこで、この時間はこの冒頭文にこだわって分析してみようと思います。

ところでＡ君、『竹取物語』の冒頭ってどうなっていたっけ？

Ａ：「今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。」

Ｈ：そうだね。ちなみに、『竹取物語』の主人公って誰？

Ａ：かぐや姫ですよね。

Ｈ：その通り。だけど、タイトルを見ると誰が主人公に思える？

Ａ：あ～、竹取の翁ですね。

Ｈ：そう。だから『竹取物語』というのは、タイトルだけ見ると、ずいぶん変わった物語のような気がするね。ところで、Ｂさん、『源氏物語』の主人公って誰？

Ｂ：光源氏です。

Ｈ：そう。で、タイトルが『源氏物語』になっているから、当然この「源氏」は光源氏のことだと思うかもしれないけど、実はこの源氏は光源氏の源氏、つまり固有名詞の源氏ではなくて、普通名詞の源氏です。Ｃさん、源氏ってどういう意味だか知ってる？

Ｃ：え～、源氏って名前だと思ってました。

Ｈ：そう、名前なんだけど、正確にいうと何て名前なんだと思う？

Ｃ：・・・・・

Ｈ：ヒント。しずかちゃんといえば？

Ｃ：あ～、源（みなもと）ですか？

Ｈ：その通り。つまり、源氏というのは、源という姓をもった人のことを言うんだけど、歴史で「××源氏」というのを習わなかったかな？　Ｄ君。

Ｄ：鎌倉幕府を開いた源頼朝の清和源氏ですか？

Ｈ：そう。では、その清和って何だろう？

Ｄ：清和天皇。

Ｈ：その通り。つまり、清和源氏というのは、第五十六代清和天皇の皇子を祖とするということになっている一族なんだけど、ちなみに、天皇家の姓は何だっけ？　雅子様の名字は何？　Ｅさん。

Ｅ：小和田雅子さん。

Ｈ：それは結婚前ですね。結婚後は「雅子様」でしょ？　つまり、結婚後は名字がないわけです。天皇家には名字がない。それなのに、源という姓があるのはどうしてかというと、これを「賜姓源氏」といいます（板書）。源という姓を与えることで臣下に下す、つまり、皇族の身分から離れるということなんです。直接は関係ないけど、源平合戦の平家、つまり平氏は何平氏だっけ？　Ｆ君。

Ｆ：桓武平氏。

Ｈ：そう。つまり、彼らは、桓武天皇の皇子を祖とする一族の誰かが、平という姓をもらって臣下となったという物語を共有しているわけ。仁明平氏というのもあるらしい。

　天皇の地位は、血によってのみ担保されるから、血が絶えないようにというので、たくさんの奥様がいらっしゃった。でも逆に、子どもがたくさん生まれると、天皇の地位につける人の数は限られているわけだから、残りの子どもたちをどうしようかということになる。当然、朝廷は面倒を見続けることになるわけだけど、その費用もバカにならない。国家財政を逼迫させることになる。そこで、天皇になる可能性が薄くなってきた段階で、賜姓、つまり姓を与えて皇族の身分から離脱させてしまうわけだ。

　まあ、今の説明は概要で、多少いい加減な部分もあるかも知れないから、興味のある人は歴史事典などで調べてみて下さい。要は、ここでいう源氏とは賜姓源氏、つまり、「源という姓をもらって皇族としての身分を離れた人」という意味だということです（板書）。ちなみに、清和源氏の源頼朝は清和天皇から十代目、それに対してこの『源氏物語』の光源氏は、お父さんが天皇そのものだから一世の源氏ということになり、源頼朝とは格が違うことになります。

●『源氏物語』とは？

Ｈ：ところで、この源氏というのは、当時の貴族にとってはどんなイメージだったと思う？　Ｇ君。

Ｇ：カッコイイ人とか？

Ｈ：どうしてそう思うの。

Ｇ：『源氏物語』の主人公だから。

Ｈ：なるほど、物語の主人公になるわけだから、かっこよくなきゃまずいよね。ところが

微妙なんですね。源という姓をもらって皇族ではなくなったということは、天皇という地位と関連づけるとどういうことだろう？　もう一度G君。

G：天皇のなる可能性がなくなったということですか。

H：その通り。では、天皇を中心とした平安時代にあって、元皇族でありながら、皇位継承権を失った人は魅力的だろうか？

G：う～ん、あまり魅力的でない？

H：そうです。もちろん、政治の世界から解放されて優雅に過ごす文化人といったイメージもあり得るとは思うんだけど、『源氏物語』というのは「皇位継承権を失った者の物語」ということになるんですね（板書）。

　ところが、この作品が偉大なのは、第三十三巻の「藤裏葉」の巻で源氏は「准太上天皇」という地位につきます。准がつきますが、太上天皇というのはもとの天皇、つまり「上皇」とか「院」に相当するので、結局皇位についたというのと同じなんです。だから、紫式部の書いた『源氏物語』とは、「皇位継承権を失った者が皇位に就く物語」ということなんですね（板書）。ここがスゴいところです。しかもどうしてそれが可能になったのかというところに、この物語の第一部の一番の眼目があって、そこがまた面白いんですが、このあらすじの話についてはまたそのうち。ついつい面白いので、私ばかり話してしまいました。

●冒頭の文

H：さて、冒頭の文ですが、この文には特色があります。とりあえず、訳してみようかな。「いづれの御時にか」と始まっているけど、まず「に」と「か」について文法的に説明してくれる？　Ｉさん。

Ｉ：「に」は断定の助動詞「なり」の連用形、「か」は係助詞です。

H：正解ですが、「に」はなんで断定だと分かる？

Ｉ：「御時にか」の下に「ありけむ」が省略されていると考えられるので、この「に」は補助動詞「あり」の上の「に」ということになり、断定と判断できます。

H：今の中に正解が出ていますが、係助詞「か」の結びは？

Ｉ：省略されている「ありけむ」の「けむ」が過去推量の助動詞「けむ」の連体形です。

H：そう、いわゆる「結びの省略」ですね。「あらむ」の省略と考えてもいいです。ついでに「か」の意味は？　もう一度Ｉさん。

Ｉ：疑問です。

H：では、とりあえず訳してみよう。　Ｊさん。

Ｊ：「どの天皇のご治世だったか」。

H：「時」に「御」がついていて、天皇の治世という意味ですね。では、「女御・更衣あま　た候ひ給ひける中に」だけど、この部分の敬語を指摘してくれるかな、K君。

K：「候ひ」と「給ひ」。

H：「候ひ」は尊敬語・謙譲語・丁寧語のどれ？

K：謙譲語。

H：ちなみに、尊敬・謙譲・丁寧の区別はどうやってつけるのだっけ？

K：暗記です。

Ｈ：その通り。五語だけは暗記だけでは解決しないんたけど、基本は暗記するんでした。では、この「候ひ」は動詞、補助動詞？

Ｋ：動詞。

Ｈ：確認ですが、何で動詞か補助動詞かを区別するんだっけ？

Ｋ：訳す時に、動詞なら一対一対応で訳語を思い出す、補助動詞なら公式の訳を当てはめればいいからです。

Ｈ：正解。では、この「候ひ」は誰に対する敬意？

★ここで、敬語の敬意の方向については、「誰への」は聞いているが、「誰からの」は聞いていない。次の教材で、助動詞「き」「けり」の話と関連させながら、『源氏物語』の語り手について話すことを予定にしているからである。なお、『源氏物語』では、地の文の「誰からの」は、「語り手からの」ということなる。

Ｋ：帝。

Ｈ：正解。次に、「給ひ」は、尊敬語・謙譲語・丁寧語？

Ｋ：尊敬語。

Ｈ：動詞、補助動詞？

Ｋ：補助動詞。

Ｈ：敬意の対象は？

Ｋ：女御、更衣。

Ｈ：その通り。訳して。

Ｋ：「女御、更衣がたくさんお仕えなさっていた中に」。

Ｈ：では、続きの部分を訳して。　Ｌさん。

Ｌ：たいそう高貴な身分というわけではないけれど、格別に帝の寵愛を得ていらっしゃる方がいた。

Ｈ：「いと～打ち消し」で「それほど～ない」の意。「時めく」は「時勢に合って栄える」の意で、ここは奥様のことだから「帝からの寵愛を受ける」くらいの意。骨格は合っていますが、実は「が」の訳が違います。逆接の接続助詞で訳したくなるのは、常識的な文脈感覚として正しいとは思う。しかし、これは難しいから仕方ないんだけど、この時代の「が」には、接続助詞の用法がないことが分かっているんです。よってこの「が」は格助詞。では、どう訳したらいいですか？　M君。

Ｍ：たいそう高貴な身分というわけではない方が、格別に帝の寵愛を得ていらっしゃるということがあった。

Ｈ：今の「が」は何格ですか？

Ｍ：主格です。

Ｈ：そうね、だから「時めき給ふ」の下に「こと」を補ったね。ちなみに、同格と考えるとどうなるかな？　もう一度M君。

Ｍ：たいそう高貴な身分というわけではない方で、格別に帝の寵愛を得ていらっしゃる方がいた。

Ｈ：そうですね。どちらでもいいけど、参考書では同格になっている場合が多いかな。さて、訳ができたけど、今の訳から分かるように、「いづれの御時にか」という冒頭の部分は疑問になっていますね（板書する）。で、実は、この冒頭の一文は、さらに色々な

疑問を読者に誘発するようになっているんだけど、例えばどんな疑問が浮かぶのだろう？　続きの部分を読んでちょっと考えてみて。では、N君。

N：分かりません。

H：急には難しいかもね。「女御・更衣あまた候ひ給ひける中に」の部分ではどうだろう？

N：・・・・・

H：「あまた候ひ給ひける」…「あまた」…

N：ああ、「あまた」が何人くらいとか？

H：その通り。「たくさん」ってあるわけだけど、そうなると何人くらい奥様がいらしたのかなと思いますよね。私の奥様はたった一人ですが、一人だって苦しんでいるわけだし（笑）（板書する）。では、「いとやむごとなき際にはあらぬ」の部分はどうでしょう？　Oさん。

O：「やむごとなし」が「高貴な身分」だから、そうでないとすると、どれくらいの身分なのかなという疑問がわくと思います。

H：そうですね（板書する）。そして、最後の部分です。Pさん、どう？

P：どうして愛されているんだろうか。

H：そう（板書する）。つまり、冒頭文には、読者がさまざまな疑問を思い浮かべるようになっている。だから、すぐに物語の世界に入っていけるようになっているわけ。で、一番大切な疑問がまだ出ていないんだけど、今出してもらった疑問のうち、本文を読むことですぐに解決できるものがある。それは「いとやむごとなき際にはあらぬ」なんだけど、さて、この答えはどこを読むとわかるかな？　Q君

Q：「同じほど、それより下郎の更衣たちは、まして安からず」とあるので、更衣と分かります。

H：正解。では、女御・更衣のところの注を見て。「どちらも天皇の夫人。「女御」は皇后・中宮に次ぎ、「更衣」は女御に次ぐ。」とあるね。女御と更衣では女御が偉いわけだが、この奥様の身分はどうやって決まるんだと思いますか？　R君。

R：実家の父親の地位によるのだと思います。

H：その通り。だから、ちょっと注に書き加えておいて。女御は父親が大臣以上、更衣は大納言以下ということです。さて、このことを踏まえると、もう一カ所、この「やむごとなき際にはあらぬ」身分が分かる箇所がある。どこだろう？　S君？

S：第二段落の「父の大納言な亡くなりて」だと思います。

H：そう。そこでも分かりますね。さて、一番大切な疑問がまだあるといったけど、それは今の「女御、更衣」の注と関係するんだけど、分かるかな？　Tさん。

T：分かりません。

H：難しいよ。でも、注をよく見て。そこに本文に述べられていない要素があるでしょ？

T：皇后、中宮ですか？

H：その通り。ここで皇后、中宮についてはなぜ触れられていないのだと思う？

T：まだいないから？

H：その通りです。ちなみにTさん、皇后と中宮は同じと考えていいんだけど、一人の天皇に皇后または中宮は何人いるか知ってる？

T：一人。

H：そう、一人なんです。枕草子をやった時に、道長が自分の娘彰子を中宮にしたいがために、無理矢理定子を皇后にしてしまったという話をしたでしょ。奥様方である女御、更衣は「あまた」いても、中宮はそのうちの一人しかなれない。では、その唯一の中宮がまだ決まっていない現在、奥様たちはどんな状態にいると思う？　U君。

U：みんな平等で幸せだとか。

H：U君はイイ人ですね（笑）。まあそうなんだけど、今後は一人だけが中宮になるわけ。どんな雰囲気だと思う？

U：みながその地位を狙っている状態とかですか。

H：そうです。つまり、多くの奥様方が唯一の地位を狙って暗闘しているといった状況だったと想像できるんだろうと思います。女の世界は怖いですからね（笑）（板書する）。

H：ちなみに「あまた」については、何人くらいだと思いますか？　Vさん。

V：十人くらいですか？

H：そんな感じですかね。一応、三十人くらいが想定されています。

●純愛の物語

H：さて、中宮がまだ決まっていないわけだけど、常識的には女御と更衣、どちらの地位の奥様が中宮になりそうかな？　W君。

W：女御です。

H：どうして？

W：父親の地位が高いわけだから、天皇は政治をする上で、当然その人に協力してもらわなければならないと思います。

H：そうですね。当時は摂関政治の時代で、天皇一人で政権が維持できるわけではないから、やはり有力な政治家とは良好な関係を築く必要がある。とすると、有力な政治家のお嬢さんを大切にせざるを得ないことになる。ところが、この帝が愛している女性の身分は？

W：更衣。

H：しかも父親は？

W：すでに死んでいる。

H：ね、常識では考えられない女性をこの帝は愛していることになる。中宮が決まっていないので、この天皇は若い？それとも年寄り？　Xさん。

X：若い。

H：そうだよね。しかも多くの女御・更衣がいるということは、将来有望なの？それとも期待が持てないの？

X：将来有望。

H：そう。そういう若くて将来有望だと周囲が期待していた帝が、まったくそのような周囲の思惑とは別に、常識に反する愛に走っているというのがこの物語の冒頭なんです。だから、当時の読者はこの冒頭を読んで大変びっくりしたはずなんですね。

　帝に求められる帝王学をまったく無視して、一人の女性を女性として愛する。純愛の物語として源氏物語はスタートするのです。では、次の時間から続きを読み進んで行きましょう。今日はここまで。　（以上）

（**追記**）このような実況中継風の指導例を、ホームページに掲載しています。『源氏物語』では「廃院の怪（源氏物語・夕顔）」、『枕草子』では「二月つごもりごろに」、『伊勢物語』では「第六段」と「第九段」、その他文法指導の例として「助動詞入門授業」「敬語のポイント授業」などが閲覧いただけます。漢文の「鴻門の会」、現代文の「永訣の朝」なども掲載していますので、ご高覧の上、ご感想・ご意見などをお聞かせ頂けると幸甚です。

● http://decfamily.p1.bindsite.jp/2014/　（この指導例を掲載している 2014 年のページです。年度ごとのページになっており、「about」のコーナーに他年度ページへのリンクがありますので、各年度のページの「education」のコーナーをご参照下さい。）

（東京都立日比谷高等学校指導教諭・明治大学兼任講師　　保戸塚（ほとづか）　朗（あきら））